

古市博士の薨去を悼む



我國工學界の耆宿にして過去60年間に於ける日本工業の發達史を其の一生に反映せられたる、樞密顧問官男爵工學博士古市公威先生は、一昨年末輕微なる腦溢血を起さず、爾來澁谷常盤松の自邸で静養中であつたが、終に本年1月28日午前8時享年81歳を以て薨去された。我々工學に携はる者特に悼惜の念禁ずる能はざるものがある。

博士は姫路藩士古市孝氏の長男として、安政元年に生れ、明治8年フランスに留學、理工科の學問を研究して學位を獲得、13年歸朝されたのであるが爾來内務省土木技監、土木局長、逓信省總務長官、逓信次官、鐵道作業局長官、京釜鐵道總裁、工料大學長、名譽教授、帝國學士院會員、理化學研究所長、工學會幹事、會長、理事長等として、我國工學會、工業界に遺されたる功績は今更喋々を要しないのである。宜なる哉氏は明治21年日本最初の工學博士となり、同23年第1期議會に貴族

院議員に勅選せられ、大正8年には「工」關係者として授爵の恩典に浴する先鞭をつけられ、同13年には樞密院顧問官に親任せられ、昭和8年には80歳の祝に、畏くも天皇陛下より御紋付銀盃並酒肴料を下賜せられ、宮中杖を差許さる、最大の光榮を受けられ、更に今回特旨を以て正二位に叙し、旭日桐花大綬章を加授されたのである。

博士の専攻されたる學問は土木工學である、従て其の前半生に於て新日本土木工學の基礎を築き、河川、港灣、鐵道等に偉大なる貢獻を致されたが、其の後半には我國一般工學工業に對する、最も強力なる大黒柱であられたのである。殊に大正11年工學會が其の組織を變更して、工學に關する12學會の綜合機關となると共に其の理事長に推されてより茲に十有餘年、我國工學工業の進歩發達を指導督勵され、就中昭和4年秋東京に於て開かれたる萬國工業會議には、其の會長として世界各國の學者技術家に對し、克く日本工業の重きを表現されたのである。

要するに博士は常に學識才能頗る拔群の上たるばかりでなく、人格圓満極めて德望の高い仁であつて、我々は今茲に其の訃音に接して、正に一大明星を失つたかの感に打たれたのである。誠に博士の薨去は獨り我國工學界に取りて最大の痛恨事たるのみならず、國家としても亦甚大の損失を謂ふべきである。

茲に謹みて哀悼の意を表する次第である。

(9-2-1. 告別式の日、11編)